

浄土

monthly
JŌDO

5

May 2004



法然上人讃仰会



昭和46年2月号



昭和46年3月号



昭和46年4月号



昭和46年5月号



昭和46年6月号



昭和46年7月号



昭和46年8月号



昭和46年9月号



昭和46年10月号



昭和46年11月号



昭和46年12月号



昭和47年1月号



昭和47年2月号



昭和47年3月号



昭和47年4月号



昭和47年5月号

寺院紀行

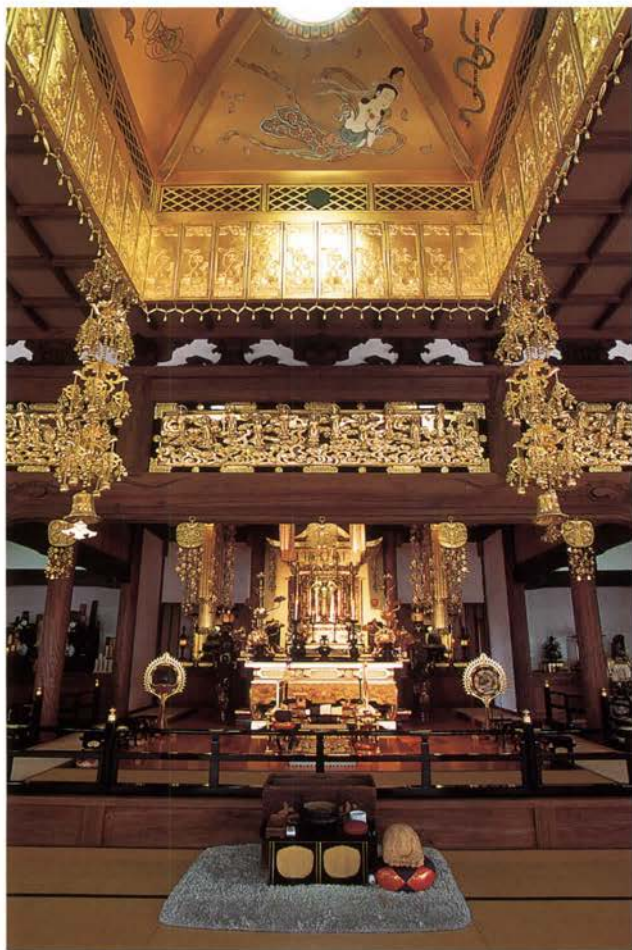
寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

佐賀・伊万里

常光寺

常光寺第二十六世光岡素生住職（中央）と常光寺の法務を手伝う同じ西部組蓮乗院の永田智之住職（向かって右）と光岡住職弟子の川村誠満師。下は常光寺本堂、東西十間、南北九間の大伽藍だ





常光寺本堂の内陣、四方に安置される四天王は檀家さんが作って寄進されたもの

本尊は阿弥陀如来像。伝弘法大師作



本堂の隣りにはコンクリート造りの納骨堂がある

寺宝の後醍醐天皇宸翰



常光寺といえば閻魔さまと言われるぐらい有名な西日本一大きい閻魔大王像。身の丈は一メートル七十センチ、正徳二（一七一二）年の作。天井の地獄変相図も見事だ



常光寺の寺宝のひとつ谷文晁の屏風図

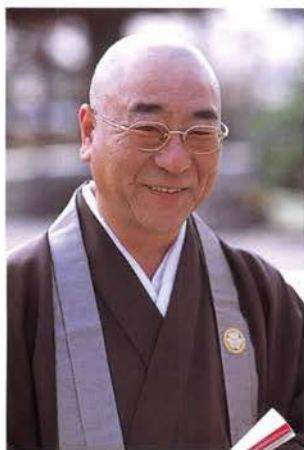
常光寺境内、左手から閻魔堂、納骨堂、本堂、客殿と続く





佐賀藩主鍋島直茂を祀る日峯さんと呼ばれる権現さま。台石には藩窯の細工人、三十一人の名が刻まれている

伊万里焼は世界に知れ渡っている。常光寺にもたくさんの伊万里焼があり、写真は古伊万里の高膳一式で、現在も使っている



現在は佐賀教区の教区長を務めるなど、多忙な光岡住職



伊万里川に架かる伊万里大橋。見事な伊万里焼が飾られている

浄土

2004/5月号 目次

カラーグラビア 寺院紀行 佐賀・伊万里 常光寺…写真=タカオカ邦彦	1
今だからこそ言える「きみ死にたまふことなかれ」…逸見久美	6
表紙のことば ……………石川忠夫	11
講演概録 仏教とキリスト教 ……………ひろさちや	12
寺院紀行 佐賀・伊万里 常光寺 ……………真山 剛	20
会いたい人 安野光雅③……………関 容子	28
響流十方 ……………袖山榮輝	36
連載 法然上人をめぐる人々……………石丸晶子	40
Jフォーラム ……………	47
浄土誌上句会 ……………選者=増田河郎子	48
マンガ『さっちゃんねッ』……………かまちよしろう	51
編集後記……………	52



表紙題字=浄土門主 中村康隆 祝下
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

今だからこそ言える

君死にたまふ
ことなかれ

逸見久美

今なら言えることが世の中には沢山ある。五十八年前、日米戦争に負けた日本が民主国家となつてから言論は自由になった。従つて過去の戦争体験も憚らずに書いたり、自由に生きる人間の権利も命の尊さも思いのまま発言できるのである。しかし言論に厳しい規制のあつた頃は、今の北朝鮮ほどではなかったが、かなり不合理で残忍なことが国家権力によつて強行されていた。それは国家が軍事体制の独裁にあつたことから起こつた悲劇なのである。四年間つづいた日米戦争で悲惨な現状を多く見てきた者には、軍事的圧力は日常茶飯事であり、天皇を絶対的存在として仰がねばならぬ教育が強いられていた。それが敗戦となつて、有史以来の現人神あらひとがみであつた天皇は国家の象徴となつて、国民の心から皇室尊崇の絶対性は消えていった。日本国は一転し、軍部に代わつて自衛隊が国民を護つてくれる現在の日本になつた。しかし今の世界情勢の不穏、争奪などの悪化と複雑な絡み合いからイラク問題を巡つて、軍隊ならぬ自衛隊が遂にイラクの国民を救うために派遣された。日本国内では派遣の是非を巡つて強硬に論議されたが、政治の主権を持つ自民党は世界平和のためという名のもとに派遣が実施された。しかし政府の方針に真つ向から堂々と反対できるようになつてゐるのは民主国家だからこそ、許されるのである。

今年の日露開戦から百年にあたる。長い鎖国から解放され、明治維新によつて近代国家として日本は歩みだした。その上日清、日露の戦勝によつて世界一の陸海軍を保有する国という傲慢さで突進し、軍事国家としての歩みを強化していった。日本開闢かいびつ以来、皇室中心の国家としての尊厳を絶対としてきた日本は、明治になつて世界的に雄飛する大日本帝國と誇り、東亜を制覇しようとしていた。そのために「滅私奉公」「尽忠報国」「忠君愛国」などの言葉を掲げ、身を以つて実践させるべき軍事体制はエスカレートし、それは日米戦

争終結まで続いた。これらの言葉は天皇のため、国のために死を恐れないという理念を植えつけて、国民を洗脳する合言葉でもあった。

晶子の詩「君死にたまふことなかれ」は日露戦争のさなかに発表された。これは出征中の弟へ書き送った手紙の端に、無事帰還を願っての一途な思いを吐露した詩であった。いま読んでみても慄然としたものと暖かい肉親愛が入り混じり「よくぞ、詠んでくれた」と共感して心底深く入り込んでくる。民主国家の今の日本だからこそ、この詩は当然なこととして受け入れられるのである。この詩の中で最も批判の対象になったのは三連目の

君死にたまふことなかれ、

すめらみことは戦ひに

おほみづからは出でまされ、

かたみに人の血を流し、

獣の道に死ねよとは、

大みこころの深ければ

もとよりいかでか思されむ

であった。明治国家に於いて天皇制絶対の「すめらみこと」つまり「天皇」という言葉を詩に入れ、更に直訴するように戦争を「獣の道」といい、戦死を名誉とするあり方に疑惑を抱き、大御心の深い天子さまのお考えはいかがかと問うている。この詩が掲載されたのは日露開戦中の一九〇四年九月の『明星』であった。その前月七日の『平民新聞』にトルストイの訳文「爾曹悔改めよ」が発表された。その中に「陸に海に野獣の如く相逐ひつあり、嗚呼是ぞ何事ぞ」とか「汝殺す勿れ」てふ訓戒などとあつて、晶子の詩に似て

いる語句が多かった。恐らく晶子はこの訳文を読んでいたろうと思われる。それ以前に鉄幹は日清戦争を批判して、第三詩歌集『鉄幹子』の歌で、

ひんがしに愚かなる国ひとつありいくさに勝ちて世に侮らる

大君の御民を死ににやる世なり他人のひきゐるいくさのなかに

創を負ひて担架のうへに子は笑みぬ嗚呼わがはひや人を殺す道

と詠み、また詩では「血写歌」と題して「あはれやな／人を殺して涙なく／おそろしや／生血に飽きて懺悔せず／英雄と／われから誇り……いたはしきかな　ち、母は／老いてたよりの／子にはなれ／あはれなるかな／たをやめは／二世のをつとに／わかれつつ／いぢらしきかな／乳のみ児は／まだ父親の顔しらず　『忠義には猶かへがたし／あつぱれ手柄したぞ』とは／あ、あ、人を殺せよと／えせ聖人のをしへかな」などとよんでいる。右の詩にみる肉親を思う気持ちは晶子の詩にも通ずる。晶子の詩はさらに、残された家族への思いやりを四、五連目に「あ、をとつとよ戦ひに／君死にたまふことなかれ／すぎにし秋を父ぎみに／おくれたまへる母ぎみは／なげきの中にいたましく／わが子を召され家を／守り／安しと聞ける大御代も／母のしら髪はまさりぬる／暖簾のかけに伏して泣く／あえかにわかし新妻を／君わするるや思へるや／十月も添はでわかれたる／少女ごころを思ひみよ／この世ひとりの君ならで／あ、また誰をたのむべき／君死にたまふことなかれ。」とうたっている。万人に通ずる真心の訴えをここに見る。

日露開戦に対して、戦前にはキリスト教、社会主義、キリスト教的社会主義者が反対し、戦時中は非戦論者への弾圧が強まる中で幸徳秋水の非戦や木下尚江の廃止の論も高かった。また『明星』では「戦争文学を排す」という声もあった。そうした状況の中でこの詩

はよまれた。しかし多くの非戦や廃止の論はあったが、「すめらみこと」に訴えるように問いかけ、当時としては言っているならぬ「天皇」という言葉を用いて直撃するように詠んだ詩は恐らくなかったであろう。この詩に対して国家主義者であり評論家として著名だった大町桂月は『太陽』誌上で「危険思想」と非難し、晶子は『明星』の「ひらきぶみ」で「忠君愛国」や「教育勅語」を引いて論ずる「流行」の方が「却って危険」だと言って対抗した。桂月は同誌で再び「乱臣也、国家の刑罪を加ふる罪人」だとも書いて誹謗した。その後の日支、日米の戦時に「天皇」を引き合いに出した人々は検挙され、拷問か、虐殺された。しかし桂月の咎めを受けても検挙されることのなかった日露戦時は軍事体制下にあったとはいえ、日米戦時に比べて未だ緩慢であったといえる。民主国家になるまで、日本の戦時下では「すめらみこと」に向かって訴えることは絶対に容赦されなかった。それを憚らずに言い切った晶子の勇氣と大胆さに深い感銘と驚異があつてか、この詩は百年経ても忘れられないのであろう。民主国家の今だからこそ言える「君死にたまふことなかれ」を、もう一度、読み直して戦争で失われてゆく人命を惜しみ、戦争のない平和で幸せな世界になってゆくことをひたすら念じてやまない。

いつみ・くみ＝元聖徳大教授
(日本近代文学) 兵庫県生まれ。早大大学院修了、実践女子大から文学博士号を受ける。著書に『評伝与謝野鉄幹晶子』、実父・翁久允を描く『翁久允と移民社会』のほか、鉄幹2冊、晶子4冊の歌集全訳。鉄幹と晶子の書簡集と全集を編さん。

表紙のことは

5月

来迎会

古代貴族が西方浄土への憧憬から来迎図に描くことの多かった浄土信仰の聖地二上山の麓にある当麻寺は、奈良時代の平地伽藍配置に従い、堂塔は南面させるが、浄土曼陀羅をかける本堂は東面して建ち、西方弥陀浄土を拝む様式をとる。伝わる曼陀羅は天平年中に製作されたが、現在安置のものは貞享の転写。後世中将姫の蓮糸曼陀羅という奇跡譚が付加され、民衆信仰をひろげた。5月14日の二十五菩薩来迎会練供養、中之坊茶室・庭園も著名である。

(株) ティー・マップ主催
「みとら」セミナーより

仏教と キリスト教

第1回

ひろさちや

宗教評論家

最初にキリスト教についてお話します。キリスト教という宗教がどういう宗教かということを理解していただいて、そして、仏教と比較したいと思います。

キリスト教というのは、ユダヤ教から生まれてきた宗教です。そういう意味で、まずはユダヤ教について考えてみたいと思います。ユダヤ教というのがどういう宗教かというと、学者によって少し年代にずれがありますが、紀元前十七世紀ごろにユダヤ人のパレスチナの地に飢饉が起きるわけです。そして、ユダヤ人が生活していけなくなって、エジプトに逃げ込みます。これについては、ユダヤ人のすべてが逃げ込んだわけではなく、一部族であったという説のほうが強いんですが、ともかく、ユダヤ人がパレスチナの地で食べていけなくなってエジプトに逃げ込むわけです。

エジプトといいますと、今は貧しい、貧困の代名詞みたいになっていますが、昔は豊か

な国だったんです。インドもエジプトも非常に豊かな土地であって、イギリスやヨーロッパの列強が植民地支配をやって徹底的に搾取した。それで貧しくなったわけです。本来はエジプトやインドは豊かな国でした。

そして、パレスチナにいたユダヤ人が、生きていけなくなってエジプトに逃げ込んだ。エジプトは、最初のうちは割合優遇してくれましたが、そのうちにユダヤ人は他民族ですから、奴隷にされてしまった。エジプト人はこの奴隷を使ってピラミッドをつくったりするようになったわけですよ。

それから大体四百年くらい経過して、紀元前十三世紀ごろに、一人の預言者が出てきます。「モーセ」という預言者です。ヘブライ語で読めば「モーセ」。英語読みにすると「モーゼ」と濁ります。「預言者」というのは、神様から言葉を預かってきて私たちに伝えてくれるという意味です。

モーセは、「お前たちは、私と、私を唯一

絶対の神とするという契約を結びなさい」というわけです。「あなた方ユダヤ人が、私と契約を結べ。私だけを唯一絶対の神とする。ほかの神は絶対にはやめなさい」という契約を結びなさい。そうしたら、お前たちをこのエジプトの奴隷の土地から解放して、元のバレスチナの地に戻してやる」というわけです。「私ともし契約を結ばなければ、あなた方はこのまま、民族として奴隷の境地のまま滅びるだろう。どうだ」ということで、モーセは神の言葉を告げます。そして、いろいろと紆余曲折はあったのですが、最終的には、「はい、わかりました。私たちはあなただけを唯一絶対の神とします。絶対にはやめなさい」という契約を結んだわけです。

その契約に従って神様は、人間に向かってあかしなさい、こうしなさいといって命令を發せられます。どのように生きるか、どのようにありなさいという命令を發せられた。この命令が大体六百十三条あります。

これがユダヤ教というものの一番元の形です。けれども、まだこの段階ではユダヤ教という宗教はできていません。今話したのは紀元前十二世紀ごろのことです。ユダヤ教というのが成立するのは紀元前五、六世紀ごろです。ですから、六、七百年たってからなんです。私たちが祖先は、遠い昔、このように神と契約を結んだのだ、これが私たちの祖先のひとつの思い出である——といった思い出を元にしてつくられたのがユダヤ教です。だから、ちょうど日本の天照大御神の神話みたいなもので、思い出が基本になっているわけです。この段階ではイスラエルの宗教というふうに学者は呼びますが、これがユダヤ教の原型になるわけです。

神様と人間が契約を結んだことによって、エジプト人の奴隷だったユダヤ人は、その奴隷の境地から解放されました。「私たちは、奴隷になっていたのだけれども、神と契約を結び、神の言うことを聞くようになって初め

て奴隷から解放された、自由になることができたんだ」。これがひとつの基本の信仰にっているわけです。だから、ユダヤ教という宗教はいつでも、「私たちは奴隷であつたが、宗教を持つことによって初めて奴隷から解放されたんだ」ということが基本になるわけです。今に至るも、ユダヤ教から出てきたキリスト教、あるいはイスラム教という宗教も、結局はここから出てくるわけです。彼らの基本にあるのは、「絶対に奴隷になつてはいけない」という、共通の信念みたいなものです。私たちは、神を持たなければ、宗教を持たなければすぐに奴隷になってしまうんだ、という感覚です。

そしてよくユダヤ教やキリスト教は一神教だといいますが、一神教というのは神様が一人しかいないという意味ではないのです。神様はいっぱいいます。いっぱいいるけれども、私は他のものは神様と認めない。私はこの神だけを唯一絶対の神とします、という契約な

んです。ですから「私は無宗教です。何も信じていません」というのは、全く無節操な人間。もう、人間以下になつてゐるんだと思つてください。

この命令というのは、契約にもとづいて神は人間にあしなさい、こうしなさいと命令します。この命令を、律法というわけです。さっきいいましたように、六百十三もの律法が下されています。神様があなたはどう生きなさい、どうしなさいといつて六百十三の条項があります。そのうち、いろいろな条項があるんですが、たとえば、「みだりに神の名を唱えてはいけない」という命令もあります。神様を固有名詞で呼んではいけないということです。それで彼らは神を「アドナイ」と呼びました。ところが、そのうちに彼らは神様がどういう名前であつたのか発音を忘れたんです。一体当時はどう呼んでいたのか、今では全くわかりません。一時期は、「アドナイ」の母音を放り込んでみて、「エホバ」と呼ん

でいただろうといっていたんです。ですから、昔の聖書は神をエホバとよんでいます。しかし、最近はそうではないという学者の説のほうが多いのです。「ヤーウエ」と呼んでいたのだらうという説のほうが強いわけです。

ともかく、神様の名前を呼んではいけない。あるいは安息日を覚えて聖なる日にしなさい、といったような律法があります。安息日というのは日曜日ではないんです。私たちは、安息日というとすぐ日曜日というふうに考えてしましますが、聖なる日です。聖なる日ということとは、俗世間の、人間のための仕事は一切やっちゃいけない。それが安息日なんです。ですから、この日は一切仕事をしてはいけません。仕事とは何かといいますと、これまた三十九通りも定義がありまして、麦を脱穀するのになぞらえて仕事の定義がなされていますから、この解釈は非常に難しいです。たとえば、ボタンを押すということも仕事になるわけです。エレベーターに乗ってもボ

タンを押せないわけです。また、ある場所に所属しているものを、別の空間に移動させることは仕事になります。つまり、安息日に外出しようと思つて外にいくのに、鍵を持って行けない。だつて鍵は家の中にあるもんだから、それを外に持つていこうとしたら仕事になります。また、安息日には火もつけちゃいけないし、ついている火は消してもいけないんです。それも仕事になりますから。だから安息日に料理はもちろんつくれません。後に電気ができたときに電気は火の一種かどうか問題になつて、結局電気も火と同じだということ、つけてはいけないとなつたわけなんです。もちろん消してもいけません。料理は、前の晩につくつておいて、冷蔵庫に入れておくことはいいんです。冷蔵庫に入れておくことはいいけれども、冷蔵庫が困るんですね。扉を開けると、ぱつと電気がついちゃうから安息日の違反になつてしまう。だから、電気がつかないように工夫されたスイッチがあるわけ

です。安息日の前の日からスイッチを消しておいて、冷蔵庫を開けてもつかないようになっています。さらに、電灯ができたときも困っちゃって、自動ランプなんていうものは、今は自動的にやっていますが、タイマーのない時代は困りました。

しかし、実は、ユダヤ教とイスラム教とキリスト教は皆安息日が違いますので余り困らないのです。ユダヤ教徒の安息日は土曜日です。キリスト教徒は大体日曜日。イスラム教徒は金曜日です。ですから、隣のおっちゃん、異教徒だったら頼むわけです。「すみません、電気をつけにきてください」「消しにきてください」そして、自分は相手が安息日の日に行つてやればいいわけで、家族が一人増えたと思えば何でもないわけです。

そういうふうにして、彼らは神様の命令を忠実に守ります。そして、彼らは「命令を忠実に守っていれば、やがて神様はこの契約を更改してくれる。もっと新しい、いい契約に

変えてくれる」と信じているわけです。「神様はきつと私たちに、この契約を変えてくれるぞ」という期待がありました。

その期待に応えて出てくるのがイエス・キリストです。このイエス・キリストが、「私は神の子である」と言ったわけです。実際彼が神の子であると言ったかどうかはわかりませんが、後代の人々は、イエスを神の子と信じたわけです。そして、神様の子供として、「あなた方が期待していたその新しい契約を持ってきたよ」と言ったわけです。それが新しい契約、新約なんです。

ですから、新約聖書とありますが、あれは「新しい翻訳」の意味じゃないんです。「新しい契約」なんです。それに対して、今まであった六百十三条もある旧約聖書。これが旧約になるわけです。

ここでひとつ大きな違いがあります。それは何かと言ったら、今までは、最初にモーセ

という預言者が与えた契約なんです。神様の契約をモーセという預言者が取り次いだんです。それに対してこちらは、神様の子供そのものが持ってきた。蛙の子は蛙ですね。蛙の子はおたまじゃくしという名前がついているけれども、あれは蛙なんです。だから、蛙の子は蛙であるように、神の子は神なんです。つまり、「神様がじかに与えた契約」だというのが新約の意味です。だから少し異質な契約になっています。

それまでは預言者はいろいろ出てきてます。旧約のもとでいろいろ預言者は出てくるわけで、なぜ預言者が出て来るかと言えば、私たちがこの契約を守っていなければ、「お前たち、何やっているのだ。契約違反をやっているぞ」と言って、警告を発しに来る。そういう預言者が出て来るわけです。しかし、最終的にこのイエス・キリストというのが紀元前後のころに出てきて、「私は、あなた方が期待していた新しい契約を持ってきた」と

いうわけです。

この新しい契約は何かといいますと、「福音」です。もはや「律法」ではないわけです。祝福の言葉なんです。神様があなた方を祝福しておられる。つまり、エジプトの土地で奴隷的に扱われていたという段階においては自由ではなかった。でも、ユダヤ教徒の段階においてユダヤ人は、神様の命令に服する、神様の奴隷になり、人間の奴隷ではなくなった。神の奴隷になることによって人間の奴隷から解放されました。そして、イエスによって、「あなた方はもはや奴隷ではないのだ。自由なのだ」と確認された。もう一度ここで、神の奴隷からも解放されたわけです。

(つづく)

法然上人鑽仰会

公開講演会の
お知らせ

講師

野口 健

アルピニスト

- 日 時** 平成16年6月29日(火曜日)
午後2時より3時半まで
- 場 所** 大本山増上寺慈雲閣
東京都港区芝公園4-7-4 03-3482-1431
地下鉄都営三田線/御成門駅下車徒歩5分
地下鉄都営浅草線・大江戸線/大門駅下車徒歩7分
JR線/浜松町駅下車徒歩10分
- 会 費** 会員 無料
一般 千円
- 申し込み** 会員、一般ともに不要
- 主 催** 法然上人鑽仰会
- 後 援** 浄土宗総合研究所



講師略歴/のぐちけん

1973年8月アメリカ・ボストン生まれ。外交官の父とともに世界各地で幼年時代を過ごす。日本の地を初めて踏んだのは4歳の時。英国立教学院で中高校時代を過ごす。自宅謹慎処分を受ける。その時、故植村直己の『青春を山に賭けて』に感銘を受け登山を志す。高校卒業後、亜細亜大学国際関係学部に入學、1999年三度目の挑戦でエベレスト登頂に成功する。二十五歳で七大大陸最高峰世界最年少登頂記録を樹立する。以来エベレストのゴミ問題、シェルパー問題などに取組み、現在は小中学生を対象にした「野口健 自然学校」を開校。また、「富士山から日本を変える」をスローガンに精力的に講演活動を行っている。

富士山から日本を変える

問い合わせ先

法然上人鑽仰会 講演会係

105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 電話: 03-3578-6947 ファクス: 03-3578-7036

寺院紀行

佐賀・伊万里

常光寺

撮影／夕力才力邦彦

文／真山剛



常光寺山門。金剛力士像を安置する仁王門だ

「父が大学二年の一月に倒れました。でも、その時はもう住職になるという意志はしっかり固まっていました」

佐賀県伊万里市、常光寺の第二十五世光岡素生住職は、十代最後の年をこう振り返る。

光岡住職は伊万里市の名刹、神通山色心院常光寺第二十四世尚誉上人の長男として昭和二十六年に生まれた。だが、高校まではお寺の跡を継ぐ気はさらさらなく、寺は兄貴の威厳よろしく弟に任せて、自分は福祉の仕事に就きたいと思っていたという。

「でも怖い先代でしたから、とても刃向かえません。ひかれた線路の上を走るしかなかったです。卒業する前に、入る大学も増上寺での寮生活も決められていました」

この企画の取材で、こういう話はしばしば聞く。長男ながらお寺を継ぐのは嫌だったという話だ。確かにお寺は歌舞伎役者のように世襲制ではない。にも関わらずお寺に生まれた跡継ぎ、ということことで小さい頃から土曜や日曜にお寺の仕事を手伝われ、遊び盛りの時代のいい思い出がない、長じて中学、高校になれば世間も広くなり夢も膨らむ。やりたいこと、してみたい仕事は山ほど出てくるが、ここでも「お前は跡取りだから坊さんになるんだ」と言われる。しかも、坊さんになるには髪の毛も剃らなくてはならない。反発するのもやむを得ない。



伊万里川沿いにある伊萬里神社。以前、香橋神社といていた頃は伊万里にあり、移転前の常光寺と並んでいた

光岡住職もそうした一人だった。

それが、いくら希望していた社会福祉の学部だとしても、望まなかった大学、そして考えもしていなかったお寺での寮生活に入れられながら、ものの二年もしない内に発心、僧侶になる決意が固まったというのである。

最初は嫌がついていても、仕方なく僧侶の資格を取り、檀信徒さんと交流していくうちに、仏教の魅力やお坊さんの良さに気付く。そして、自分が仏飯で大きくさせてもらったことへの感謝がわいてきて、自然と住職になる気持ち固まる、というのが一般的なのだが、光岡住職の場合はだいぶ違う。増上寺での二年間が百八十度、心を変えてしまったのである。何が一体そうさせたのか。

「私は大正大学入学と同時に大本山増上寺の学衆として住み込みながら学校に通いました。増上寺での仕事は法主（住職）の身の回りの世話をするものでした。そして、その時お世話させていただいたのが、椎尾弁匡大僧正台下（住職）だったのです」

読者の僧侶の方はもちろん、檀信徒さんや一般の方でもこの方の名前を聞いたことはあるかも知れない。

椎尾弁匡上人、大本山増上寺第八十二世法主。明治九年七月に名古屋の浄土真宗のお寺に生まれ、学者として、政治家として、そして僧侶としてその名を世間に轟かせた浄土宗僧侶である。



常光寺はもととは武川内（現滝川内）の山腹に開山上人が構えた庵から始まっている。正面の山腹がそのあたりになる

晩年は失明状態となり「昭和の鑑真」と言われ、亡くなった時、ある宗教紙は「巨星落つ」の見出しでその遷化を報じた有名な僧侶だ。

エピソードには事欠かない。大学の授業では講義を前の席で聴こうと、前の授業から教室に入る学生も多かったという。また共生運動を社会に唱え、政界でも活躍、財団法人共生会も結成した。そして何故か椎尾という姓ながら「しよう」と呼ばれ、今だに耳で聞き伝えられたまま、「しようべんきよう」上人と言われ続けている。

その椎尾台下の最晩年に光岡住職は仕えたのである。

「朝起きて入れ歯を洗って差し上げることから一日が始まりました。また法主はお目がお悪く、お手紙など私が代筆させていただいております。お偉い先生でしたが、ちよつとしたことでも必ず『ありがとう』と私たちまでに笑顔で言つて下さつて……」

その笑顔が本当に素敵で、『自分もこんな笑顔のお坊さんになれたなら』と思いました。それに、よく短い話をしていただきました。後で気づきましたが、これは伊万里の常光寺の跡取り息子だ、ということからだったようで……」

人との出会いが一生を変えることは多い。光岡住職にとつて十代最後の多感な時に椎尾台下という人物に出会えたことがその後を決めたと言つても過言ではない。

しかし、増上寺には何人も学衆がいる。光岡住職の時も同期が七



弘法大師作の本尊の由来などが記してある常光寺縁起の古文書

人いた。もちろん光岡住職の前後にも椎尾台下のお世話をした学衆はいる。にも関わらず、光岡住職が椎尾台下に大きな影響を受けたのには特別な理由がある。椎尾台下が特別に光岡住職に特別に目をかけたからである。

常光寺は伊万里ではもちろん、佐賀県でも指折りの名刹である。かつての佐賀藩は戦国時代から幕末まで移封転封のなかった藩で、初代藩主鍋島直茂は個性的な人物だった。佐賀という場所柄、朝鮮半島は目と鼻の先で、鎖国以前から諸外国の刺激を受け、藩内には外国からの色々な物や文化が入ってきたが、同時に伊万里からは焼物が出ていった。

有田焼、伊万里焼は有名だが、かつては伊万里湾から出荷される焼物を総称して伊万里焼といった。その美しい焼物は日本国内はもちろん外国にもその名が通っていた。つまり藩窯を持つ鍋島藩を経済的に支えていた伊万里焼の出荷所として、伊万里は佐賀藩にとって要地だったのである。

その伊万里の仏教会には真宗を除くと一宗一か寺だが、そのいずれも名利だ。そして、常光寺には藩主鍋島直茂公が止宿している。以来、幾人もの殿や姫が止宿、国主の紋章も授かっている。

さて、そうした常光寺の跡取りに椎尾台下が特に目をかけたのは、常光寺が増上寺第五十二世、広蓮社大僧正統誉上人道阿葆光円宣大

客殿入り口には移転前の山門の石碑が立っている

八十畳の客殿。この客殿には常光寺の大権越の藤山家の本尊が寄贈され、祀られている



和尚を出しているからである。

増上寺の第八十二世となる椎尾台下は、自分の身の回りの世話を
する学衆が、自分は伊万里常光寺の弟子だと言うのを聞くと、すぐ
円宣大和尚の話をしたという。

円宣大和尚は伊万里出身で七歳の時に常光寺で叔父の靈潭和上に
ついて剃髪、常光寺第十一代中興伝譽円山大和尚に師事している。
そして、増上寺の記録では享保二十（一七三五）年、十八歳の時に
増上寺に入っている。増上寺で浄土教学を学んだ後、一般仏教学、
神道、そして天台宗、律学規範も修め、御所から上人号を賜り、再
び増上寺に戻った。そして寮持、学頭職などを経て、今度は滝山大
善寺、太田大光院、小石川伝通院の住職を歴任。寛政二（一七九〇）
年には増上寺住職として三度増上寺に戻っている。その後西下、常
光寺で説法供養もしている。その著書は仏教学の中心となる貴重な
もので、増上寺の歴代住職の中でも名を残す大和尚の一人だ。

その円宣大和尚が出たお寺の跡取り、である。椎尾台下も何かに
つけ光岡住職に目をかけ、色々な話をした。それが光岡住職の気持
ちを変えさせたのである。先代が病気で倒れて、光岡住職の東京と
佐賀の往復生活が始まった。増上寺も下山せざるを得なかった。

「先代は五年半病に伏せ、遷化しました。そして二十五歳の時、住
職になりました。二年後には西部組の組長に、翌年に結婚。若い頃



檀家さんの手作りの四天王が内陣に
祀られている

に色々ありました。増上寺時代に身につけたこと、椎尾台下から教わったことが本当に役に立ちました」

そんな光岡住職の跡取りは、というと、副住職の息子さんがいる。だが、自分が世間を見る間もなく住職になったこともあり、息子には世間を見てから坊さんになれ、と一般社会に出している。大正大学を昨年卒業、八月のお盆には必ず休ませてもらえるという条件で仕事をしているという。そして、もうしばらくは世間を見させるつもりだという。

さて、その副住職が帰ってくる八月に、常光寺名物の閻魔さまの市が行われる。地元のタクシーで「常光寺」と言っただけでなく、も、「閻魔さまの寺」と言えはわかるほど有名な閻魔さまで、身の丈一メートル七十センチは西日本一の大きさだ。常光寺は享保年間（一七一六～一七三六）に火災に遭っているが、閻魔さまを中心として五体の像は幸いにも焼失を逃れた強運の閻魔さまだ。

その閻魔さまにはかつては修学旅行や遠足の生徒がお参りしたという。平成八年に常光寺が伊万里駅近くから現在地に移転する前の話で、今ではさすがに閻魔さまの威厳も衰えたのか、小学生は来なくなり、かわりに幼稚園や保育園の子供が、この閻魔さまをお参りするという。また、若い奥さんが小さい子供に、「悪いことをすると、このおっかないおじさんに怖いところにやられちゃうのよ」と



日峯さん（神社）から見下ろす伊
万里焼の窯元が立ち並ぶ大河内



話しているという、天井の地獄変相図とともに常光寺の寺宝のひとつだが、いまだ大活躍というわけだ。

さて、閻魔さま以外の寺宝もグラビアで紹介したが、常光寺には寺宝にまけない財産がある。それは、常光寺を支え続ける檀家さんたちだ。

常光寺は開山上人が現在地より西北へ約十三キロメートル、長崎県との県境に近い滝川内の山腹に建てた庵から始まっている。そしてその滝川内の檀家が伊万里市内への移転に大いに協力した。今から四百年以上も前の話だ。だが、今でも滝川内の檀家さんたちをその時の御礼で大事にしている。そしてまた滝川内の檀家さんたちもお寺を大事にしている。

また平成八年に移転した現在の境内地も円宣大和尚の子孫である檀家総代から寄進された土地だ。

取材中、光岡住職が息子さんの話しをする時、世間をよく見て来て欲しい、色々な人がいて色々な生活があるんですから、と語ったのが印象的だった。自分は世間に出ることなく住職になったことを十分に承知し、その上で世間と付き合ってきたからこそ、こうした寺を支えてくれた人たちを大切にし、それがまた寄進していただけるお寺にしているのだらう。檀信徒あつてのお寺だが、常光寺はそれを十二分に理解し、大切にしているお寺である。(ルポライター)

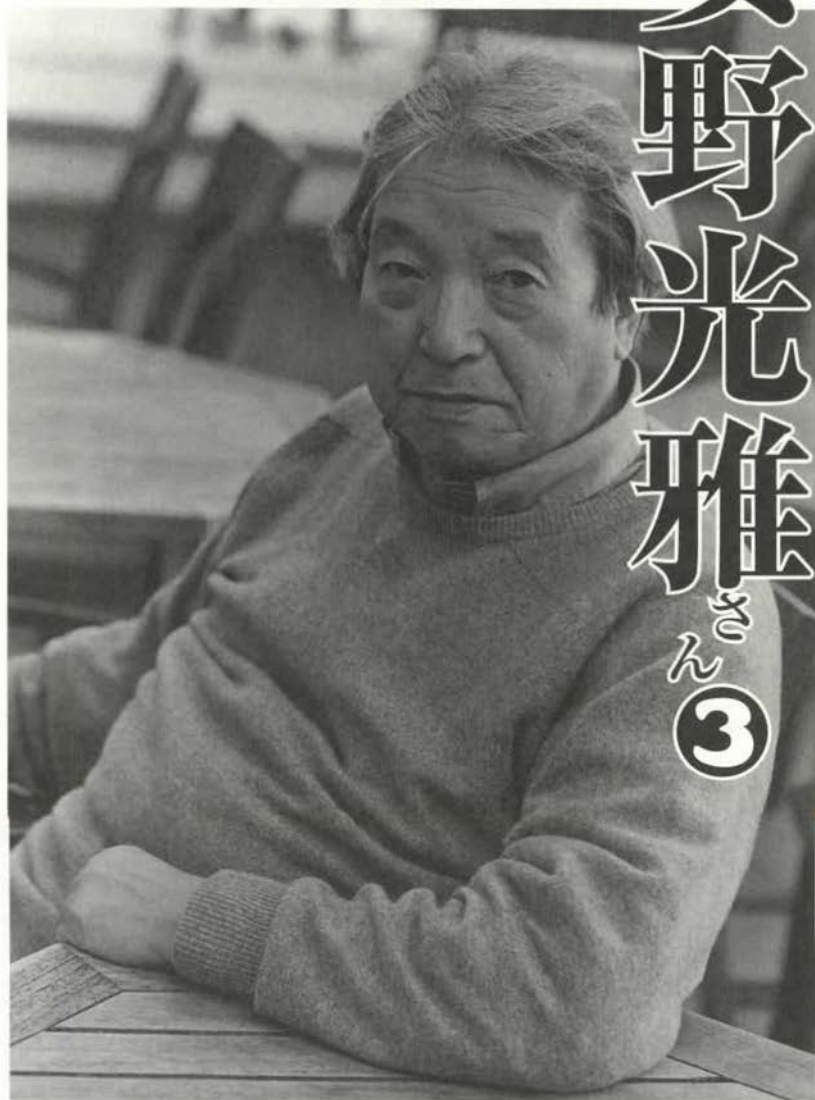
玄界灘から深く入り組んだ伊万里湾。伊万里湾大橋からさらに入った所には、日本で二か所しかない天然記念物のカブトガニの繁殖地がある(左)



連載

会いたい人
関 容子

安野光雅
さん
③



池袋ジュンク堂書店にて

絵というものは、描いていくうちにそれが単なるキャンバスと絵の具ではなくなつて、突然、絵に変身する瞬間がある……という安野さんの話が興味深かった。

「そう、キザな言い方をすれば、絵は元をただせばキャンバスの上に絵の具を塗つたものにすぎない。それが絵になった、というときがあつたり、ついにならなかつた、ということがあつたりする。原稿用紙の上にくら文字を並べても、文字の羅列じゃ作品にならない。どれほど声を大にして演説しても、心に響かなきゃただの言葉でしかないように」

絵はどこでやめておくか、絵筆を置くときが難しい、と言つたのは、藤田嗣治だったろうか。何かで読んだ気がする。

「嘘を一つつくとかとからどんどんつかなきやならなくなるみたいに、絵もエスカレートして行つてゴテゴテ厚塗りになつたりすることがあるのです。この間、円山応挙展へ行つて、風呂先屏風にサーツサーツと横や斜めに線を引っ張つただけの絵を見たんだけど、こ

れが湖の水のひび割れたところを描いてるんです。遠近もちゃんとついていて、この発想は現代絵画も及ばないんじゃないか、とつくづく感心して眺めましたよ」

そう言えば、安野さんが生前の有元利夫の個展に行き、感銘を受けて立ちつくしていた姿にもこれは重なる、と思つた。『聖フランチェスコ』など、どこかヨーロッパの匂いのある日本人離れのした有元の絵が私も大好きなので、安野さんの本で読んだ二人の画家の情景がずっと心に残っていた。

「素敵な人だったね。ああいう絵を描いて、あんな文章を書いて、ああした考え方を……三位一体というか、そのうちどれが欠けてももう彼ではないような気がする。わたしがじつと作品を見ると彼の近寄ってくる気配がしたんで称賛の言葉を浴びせようとするのを、まあまあと制止する、って感じでね、わたしの肩から背中にかけて、彼が両の掌をそつと当ててくれたんですよ。あたたかくつてそこから翼でも生えてくるんじゃないか、

って気がしたね（笑）」

翼の生えた安野さんは、さしずめ大天使ガブリエルか。

「有元さんの絵は多分ヨーロッパに持って行ってもびつくりされる。突然変異で生まれたものだと思う。モジリアニがやはりそうですね。前にも後にも類型がない。武満徹の音楽がそうだし、ビートルズなんかもそう。最初はヘンだと思われてて、突然新しい品種ができてくるんだね。有元さんは自分で一つの世界を見つけた人だけど、また恥ずかしげもなくこれを真似するやつがいるんですよ。そんなことしないで、まだ現われてこないだけで新しい世界が必ずあるんだから、そのために戦えばいいのにね。初期のうちは人の真似もいいけど、やがて自分の世界を確立して行かないと……」

恥ずかしいことをしない、というのも安野さんの美意識の一つだろう。

安野さんの読書量の多さと、その記憶力に

はびつくりさせられる。

「本を読むというのはすごいことだと思いますよ。特に子どものころに読んだものはずっと残るからね。今の子でも、本が面白いことをわからせてやれば読むんだよね。以前、ある文学選集（文学の森）の編集をしたことがあって、鶴見俊輔さんの記憶力のすごさに驚きました。あと、もう二つ三つ入れようか、ということになって、題名を言うのと、あ、それはね、って鶴見さんが全部言うの。通俗的なくだらぬような本まで読んで、しかもちゃんと憶えてるんだからすごい」

もう一人、読書量と記憶力では何と言っても司馬遼太郎だそうだが、ここに安野さんのちよつとした自慢話がある。

「昔、『修身』の教科書の挿し絵に、一人は木の根方にみすばらしくうずくまって、一人はトンビを着た立派な紳士が立って、この二人は勉強をしたかしかかったの結果でこうなりました、って書いてあるの。あるときその話をしたら司馬さんが、それは津和野み

たいに妙に教育熱心な土地の特別な教科書で、大阪じゃそんなの習わなかったよ、って強情を張るんだ。でもわたしは絵ではっきり憶えてるんだから確かなはずだ、ってあとで弟に調べてもらったら、ずいぶん時間が経ってからやっと前橋の教育資料館で戦前の小学二年の修身の教科書を見つけて、コピーを取って送ってくれたけど、それを見せたかった司馬さんはもう亡くなったあとなのが残念だった」

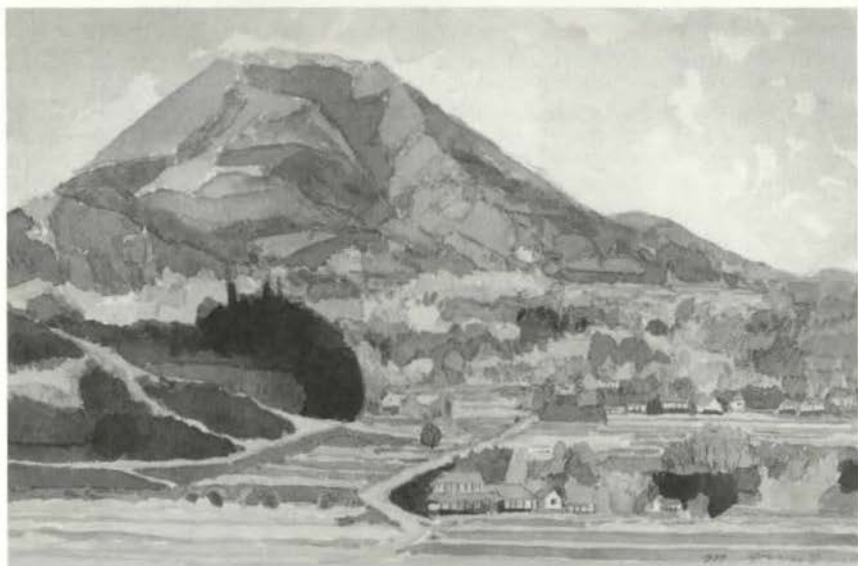
司馬遼太郎の『街道を行く』の挿し絵は、須田剋太のあとを安野さんが引き受けて、七年間コンビを組んだ。

「取材でずいぶん一緒に旅をしたけど、晩御飯のときの話が十日間なら十回とも全部違つて、実に面白いの。まるで千夜一夜物語みたいだった。自分が今度書こうとしていることを、あの場で予習したり反応を見たりしてたんじゃないか、とも思えますが、とにかく面白かった。その宿屋の主人に色紙を二枚持つてこられたりすると、わたしは絵描きだか

ら簡単にかけなくて困つてたの。すると翌日別の宿屋へ行つて色紙を二枚出されると、あ、安野さんはいいいからね、つてさつさと二枚とも司馬さんが書いてくれた。書く言葉も毎晩全部違つてたね。しかしあれだけ功なり名遂げた人で、あそこまで配慮のある人は滅多にいないと思いますよ」

安野さんも、多忙でいながら律儀な司馬さんに負担をかけまいとして、自分の著書を送ることを差し控える配慮をしたという。

「葬儀のとき、司馬さんの礼状の葉書を三枚も持つてきているやつがいて、いいな、こいつ、と思つたね（笑）。その後、上着とか万年筆とかノートとかもらつたつて話をいろんな人から聞いて、わたしは何ももらつてなかつた……と奥さんに言つたら、あら、そうなの？　つて、ネクタイと、靴三足もらつたの。サイズが24で、同じだったから。それでこの間、司馬さんの住んでた東大阪市に用事があつて行くときに、それ履いて行つたの。地面がもし憶えてるなら、あれ？　司馬さんの靴



安野光雄美術館蔵、安野光雄画「青野山」。
(©ANNO&ANNO ART MUSEUM)



下関でのサイン会にて

が歩いてるよ、と思うかな、と思ってね」

安野さんの絵本の中でも、『きつねが拾ったグリム童話』というのがとりわけ好きだ。上段にグリムのオリジナル、下段に字の読めない狐のお父さんが絵を見て想像しながら子狐に読んで聞かせる物語、という趣向。この親狐と、津和野の安野さんのお父さんのイメージがちよつと重なって、下段を読むときに思わず「サテサーテ」と合いの手を入れ、笑ってしまった。

「狐のお父さんが、この本は一回しか読んで

はいけないと書いてある……なんて言う。口から出まかせに読んでるから二度と同じには読めないわけね（笑）。たしかに親父がモデルかもしれない。まあ実は、外国へ行つたときの体験がヒントなんだけどね。あの人は何をしようとしてるのかとか、お手洗いのある場所とかは、目見当でだいたいわかるじゃない。たまに誤解もあるんだけど」

安野さんの並外れた想像力や空想癖は、洒落っ氣といたずら好きにも通じている。たとえば年賀状。

「赤い縁取りの葉書の角がちょっと折れたように印刷して、そこをカットして投函したら、郵便局から呼び出しがあつて、葉書は四角形のものでこれは五角形になるからダメです、って言われた。じゃあ絵葉書で波打ってるみたいな形のはどうなの？ と訊いたら、調べときます、って。でも返事を待つてられないんで、一ぺんに出すから目立つんだと思って、東京中あちこち歩いて少しずつ出して歩いた（笑）。こんなことやって何が楽しいのかと思

われるかも知れないけど、好きなんだね」

しかし凝り過ぎて大変な事件を引き起こしたことがあるという。

「そうそう、二十年以上前の戌年のとき。刑務所からの年賀状、というところでもないことを考えて、今年から真人間になつて働きますからよろしく……なんてわざと上等じゃない活字でそれらしく印刷して、刑務所長とか看守長の検閲ズミの判こを、犬山とか犬田とか犬塚とか犬づくしでボコボコ押して出したんですよ。住所はわたしの住んでる小金井町にして、そんなとこに刑務所なんかないからわかりそうなものなのにね、ほとんどの人が本気にしちゃつて（笑）、えらい騒ぎになつたの。その上また母が、いつもそうしてたものだから年賀状のわたしの名前を消して安野シカノにして何枚か出しちゃつた。そしたら近所で評判になつて、母が玄関先で転んでどつかをすりむいたまま老人会に出かけたら、こんな年寄りを拷問するなんて、ってみんなが怒りはじめてね（笑）。でも母には何のこと

やらさつぱりわからなかったそうです、耳が遠いから……」

このおふざけのツケは、当分尾を引くことになる。

「反応がいろいろでしたね。あれは捕虜虐待で今ごろつかまつたのに違いないとか、結婚詐欺じゃないかとか（笑）。もつと困ったのは、仲人をしてくれた石田校長という人が長い長い手紙をよこして、君が以前の大学紛争のことで刑務所入りしたのは誇るべきことで、真人間になるなどと言ってくれるな、わたしは君を信じている（笑）。で、今さら嘘とも言えなくなっちゃったの。また、地方へ嫁に行ってる姉たちにも迷惑が及んでね、問わず語りで、光雅があんなことをするもので困ってる、と言ってみると、そうでしょうねえ、って。ああこの人にまで広まってるのかと思って、あれはね、洒落のつもりなの、嘘の年賀状なの、と言うと、あとでみんなが何て言ったか……あの姉さんも気の毒に、洒落ということにして話をもみ消そうとしてる、

って。どこまで行ってもダメなんだ。その年、ちようど倅が高校受験のときだったから、こんなことで受かるものも受からなくなったら……と受持ちの先生が言われるんで、これが一番ゾォーッとしましたね」

果たしてこの深刻な事態は、どう收拾がつくのか。

「NHKのテレビコラムで、何を言ってもいいと言われて出たときに、この刑務所からの年賀状のことを話して、ああいうことはしないほうがいい、人がいったん信じたらなかなか消せるもんじゃない、という話をしたの。それでどうやら無事におさまりましたかね」
しかし安野さんの洒落どころが、まともな方向に向かったときの作品はすごい。

四十六文字中同じ文字は二度と使わないという超面倒な制約の「いろは歌」を、安野さんは実に二つも作っている。

まずは四季を詠みこんだ一篇。

おにも春さくれんげほめ

夏せみとひまわりのたねを

そろえてぬすむ

秋いちよう

冬へからこやし

なぜ鬼が蓮華を褒めて蟬と向日葵の種子を揃えて盗むのか、どうやって屁おなから肥料がとれるのか、ここらが安野式おとぼけの真骨頂。しかし、次のような七五で行く四行詩の格調高い津和野篇ともなると、とてもこんなきつい条件の中で作られた叙情詩とは思えないことに改めて感嘆する。

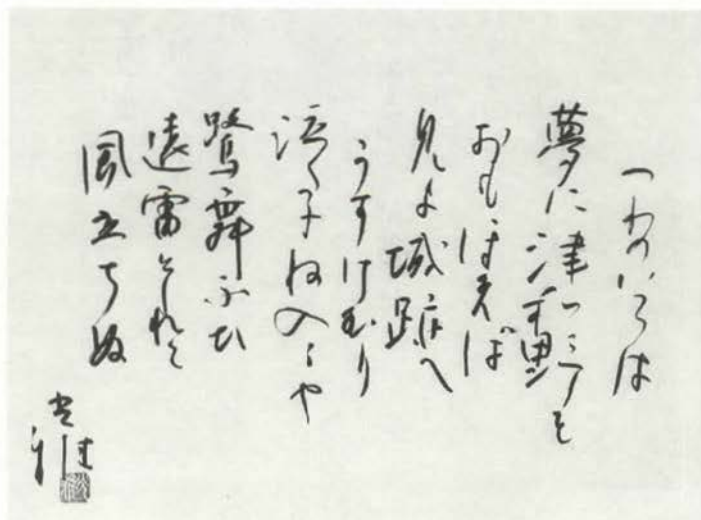
つわのいろは

夢に津和野をおもほえば

見よ城跡へうすけむり

泣く子ね入るや鷺舞ふひ

遠雷それで風たちぬ



〔世尊〕 ソーナよ、汝はどう思う。豎琴の弦を強く張り過ぎず、

緩くし過ぎず、適度な「張り」具合で留めたならば、

その時、豎琴は心地よく響くだろうか、

〔鑑賞に〕 堪えうるだろうか。

〔ソーナ〕 世尊よ。そのとおりです。

〔世尊〕 ソーナよ、そのように、「休みなしの」激し過ぎる精進では

「かえって」心が高揚して浮つくようになり、

休みを入れ過ぎると怠け心がついてしまうのだ。

パトリ語『律蔵』大品V-1（試訳）

月遅れの雛人形を飾る頃になって、正月の破魔矢を片付けることになった。正確に言うと、人形屋に修理に出したのである。なんでも家人が破魔矢をしまおうとしたら、ガラスケースの木枠がバラバラになり、ガラスがはずれ、矢羽根も何枚か切れてしまったというのだ。

自分で直そうか、修理に出そうか、考えあぐねているうちに日だけが過ぎ、先日、家人が破魔矢を台ごと抱え、私の運転で、買い求めた人形屋にようやく持ち込んだ次第である。

実を言うと、矢羽根はともかく、ケースの方は木枠の枠組みがバラバラになっただけであつたから、内心、もしかしたら素人でも接着剤を使って直せるのではないかと思っていた。それだけに「わざわざ持ち込むほどのこともない」と言われるような気がして行きにくかつたのである。

しかし、それはまったくの素人考えだった。

人形屋のご主人、バラバラになった木枠を見た途端、「大丈夫、すぐ直りますよ」とおっしゃったが、「だけど、これを直すにはある程度の注意が必要」なのだそうだ。

というのも、ご主人曰く、もともとガラスケースの木枠を組み立てる時、接着剤を薄目に塗ってあるという。ガラスが割れた場合に備えて、簡単に分解できるようになっているのだ。もし接着剤で木枠をがっちり固めてしまったならば、ガラスが割れても、木枠にはまったまま取り外すことができなくなる。頑丈にしたことがかえって仇となり、木枠そのものを壊す羽目になるのだ。当家の場合は接着が弱すぎたようだ。素人仕事を施さず修理に出して正解であった。

それにしても、最初から分解する事態を想定して接着を緩やかにしておくというのは、物事に余裕を持たせる「遊び」の発想といえる。車のハンドルにも遊びがある。ガチガチした走りにならないようハンドルの切れ方に余裕を持たせているし、野球でも、バッターを仕留めるには遊び球が必要となる。遊びは物事をスムーズに運ばせる秘訣なのである。

ところで、お釈迦さまの弟子にソーナという人がいた。熱心に修行したが、なかなか煩惱を断ち切れなかった。人一倍激しい修行を繰り返しているのに一向に心は安らかにならない。これほど修行しているのにとはい詰

め、修行をやめようかとも思った。そうした時、お釈迦さまはソーナに声をかけたのである。

琴の弦は強く張りすぎれば、音が詰まって響かない。強く弾きすぎれば切れてしまう。かといって緩すぎでは、振動すらしない。

張り過ぎず、緩め過ぎず。修行、精進といえども、適度の余裕は大切なのである。お釈迦さまの言葉に、ソーナは「一刻も早く覚らねばならない」「自分が覚れないのはおかしい」という焦りと驕った心を捨て去り、覚りを開いたという。ゲエテは「人間は、努力する限り迷うものだ」と言ったが、ソーナもその一人だったのだろう。

五月。新たな環境に馴染もうと努力し、もがいている人もいるだろうが、考え込まず遊び心を大切にしたらどうだろう。

完璧であろうとすることが、必ずしも最善であるとは限らないのだから。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

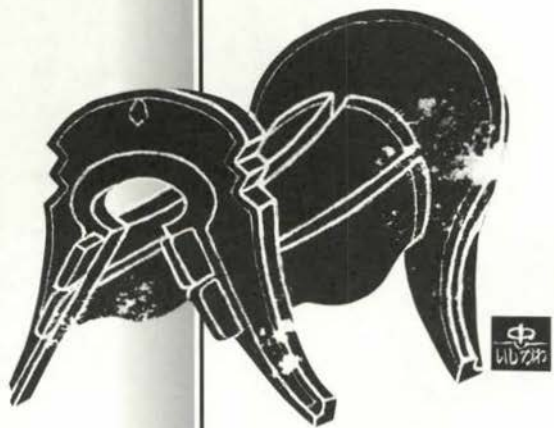
法然上人を
めぐる人々

一の谷

◆第六回◆

石丸晶子

絵・石川忠夫



(一)

一の谷の平家の陣で、経正と敦盛が話し合っていた二月六日の早暁、その前日一万余騎の武者たちを率いて三草山の平家の陣を散々に攻め落とした源義経は、軍勢を大手と搦め手の二手にわけ、彼自身は搦め手三千余騎を率いて一の谷のうしろ、鴨越え^{おんぞうし}をめざして軍を進めていった。

鴨越えは摂津の国夢野と播磨の国三木とを結ぶ六甲山越えの山路をいう。

草木深く、所々に断崖があり、附近一帯にその名が知られる評判の悪所であった。

義経の目的は鴨越えを超えたところから西に向かつて山伝いを進み、一の谷の上方鉄拐ヶ峯に出て、そこから平家の陣所に向かつて一気に駆け下りることにあつたが、鴨越えの山は深く、危険で、三千の兵たちは口々に不

平をいいはじめた。

「これは評判の悪所ではないか。鉄拐ヶ峯に出るといっても、道が分からぬ。御曹子^{おんぞうし}（義経）はわれらをこの草深い山の中で迷わせたまま、死なすつもりか」

「敵と戦うてこそ死にたいものを、かかる急所で足を踏みはずし、転げ落ちて死ぬなど、そんなバカなことがあるか」

三千の兵が口々にそう呟きながら深山に迷いはじめたとき、義経は大音声で号令をかけた。

「この山の地理に明るい者はおらぬか。われらは今、山中に閉じこめられておる。道案内のできる者は名乗り出よ」

すると、それを聞いて、武蔵国の住人で十八歳になる若武者が、義経の前に進みでていった。

「山中に迷うたとき、父が教えたものがござ

います」

「おお、それは何ぞ」

「敵にもとり籠められ、山越えの狩をもして深山に迷うたときは、老馬に手綱をむすんで打ちかけ、先に追ったてて行け。さすれば、必ず馬は道に出ようぞ、との教えでございました。」

「健気にもそういうた」義経は会心の笑みをうかべてそういうと、

「雪は野原を埋めども、老いたる馬ぞ道は知る、という古歌があるが、その通りの教えだな。されば早速」

というやいなや、全軍に号令を発した。

義経自身は白茸毛しろあしげの馬に白覆輪しろくりんの鞍をおいて、手綱をむすんで打ちかけ、馬を先に追ったてて、一度も入ったことのない鴨越えの深山に入ってしまった。

三千の軍勢もこれに従う。

「頃は旧暦の二月初旬である。山中の雪はむら消えて、ときどき鶯の鳴く声がかきこえている。そこを、さっと山風が吹き渡って、木々の梢の雪を散らしていった。」

(三)

夜になった。この暗さの中では到底、今日中に鉄拐ヶ峯にまで辿りつけない。

三千の兵はみな馬から降り、鴨越えの山中で一夜を明かすことになった。

と、そのとき、武蔵坊弁慶がひとりの老翁を伴い、義経の前に姿をあらわした。

「これは何者ぞ」義経が訊ねた。

「この山の古き獵師にございます」弁慶が答えた。

「それではこの土地の様子を知っていよう。われらはこれから、鉄拐ヶ峯の下に陣取る平家へ、馬で降りようと思うのだが、どうであ

ろう」義経がいった。

「とんでもない、思いもよらぬことでございます。鉄拐ヶ峯につきましては、三十丈（九メートル）の懸崖、十五丈の（四十五メートル）の絶壁と申して、人が通れるようなところではございません。まして御馬などがどうして通ることができませんう」

胤師は答えた。

「鹿も通らぬか」義経は訊ねた。

すると胤師は、

「鹿はまれに通うことができます。氣候が温かになりますと、草が生い茂ったところに伏そうとして、丹波の鹿は播磨の印南野へ通おうとし、ときどきこの谷を通るのでございます」

「おお、それは」

義経は顔をほころばせた。

「鹿が通うところを、どうして馬が通わない

ということがあろうぞ。そなた、すぐに道案内をいたせ」

だが胤師は首を左右に振って、

「源氏の大將軍の仰せ。謹んでお受けいたしとうございますが、わが身はこの通り年老いました。とうていお役目をはたすことはできません」

「ならば、そなたに子はなきか」義経はさらに訊ねた。

「ございます」

と胤師は、

「熊王丸と申します十六歳の子が一人おります」

「その子に道案内させよ」少しきびしい、有無をいわせぬ声で義経は命じた。



やがて熊王丸が連れてこられた。義経はす



ぐ、鎧、甲冑を彼に与え、馬に乗せて、道案内として先立てていった。

能王丸の案内のもと、義経はじめ三千余騎の源氏の軍勢が鉄拐ヶ峯に打ち上がり、断崖絶壁の遙か下にみえる平家の陣中を見下ろしたのは、三月七日午前六時である。

この草木に覆われた絶壁を馬で一氣に駆け下り、平家を急襲しようというのが、義経の作戦であった。

そのとき、鉄拐ヶ峯のそこに身をひそめる三千余騎の人馬に驚いたのであろう、大鹿が二匹、峰の下の方の平家の陣地に、絶壁から逃げ下りていった。

平家の陣から見ると、すぐうしろは遙かに見上げるような断崖絶壁である。この絶壁を伝つてはいかなる武者といえども駆け下りてくることはできない。平家の軍勢はうしろから攻めてくる敵があろうとは夢にも思わず、

油断しきっていた。

大鹿が落ちてきたのも、そこに潜む敵の軍勢に驚いてのこととは、全く気がつかなかった。

だが、人々は一応、

「これは一体何ごとか。里近くの鹿さえも、われら平家の大群を恐れて、山深くへ逃げ入っている筈。それが、うしろの絶壁から鹿が下りてくるとは只ごとではないぞ」

などと互いにいい合つて騒いでいるところに、今度は鞍置馬くらおきうまが二匹落ちてきた。峰に立つて下を見下ろしている義経が落としたのである。

馬のうち一頭は足を折つて転がり落ちたが、他の一頭は無事、平家の陣の屋形のうしろに、ぶるつと身ぶるいしたあと、すつと立ち上がった。

大鹿の場合はたまたま迷いこんだというこ

ともあろう。だが、鞍置馬が落ちてきたということは只ごとではない。

源氏がうしろの断崖絶壁の上にいるということではないか。

「すわ、一大事。敵が向かってきた」

と平家の陣では人々が騒ぎだしあわてふためきはじめた。

義経たち源氏の軍勢は、下を見下ろしてそんな平家の騒動のさまを見守っていたが、やがて義経はうしろをふり返り、馬にまたがって彼の命令を待つ三千余騎に号令を出した。

そして、

「馬は、汝等が乗って、手綱さばきを心得て降りさせるならば、怪我などせず、無事、下に降りつこうぞ」

そう声高にいうと、つづいて、

「すは、義経から駆け下りるぞ」

というや先頭に立つて鉄拐ヶ峯を馬で駆け下りていった。

三千余騎がいっせいにその義経につづいて駆け下りていく。

馬を怖れさせ、興奮させてはならない。武者たちは、えいえい、と声を押し殺して馬を励まし、彼ら自身もあまりの恐ろしさに目をふさいで駆け下りていく。

全軍降りきらぬうちに、先に立った者から順にとつと関との声をつくると、三千余騎とはいえ、その一つ一つの声が山にこだまして、数万の軍勢の関の声にひびいていった。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

● 氣

〔特選〕 氣に入らぬセーター遂に着ずじまい

片桐てい女

折角買ってきたのに色が、あるいは模様か編み方がどうも氣に入らなくて、いずれ着なければと思いながら、ずるずると季節が過ぎてしまったのだ。頂きものなら、申し訳ないけどということになる。

〔佳作〕

氣休めに占う春の銀座の灯

細田 初枝

氣力にて乗り切る日々や春嵐

金谷 友江

桜散る氣配朝より海の風

浜口 佳春

● 遊

〔特選〕 花に月遊女いそうな格子窓

増田 信子

祇園の夜桜など思い浮かべる。近くには古都らしい家並みが残っている。茶屋の並んでいる通りを歩いていると、舞子の姿を見かけ

ることがある。この句は江戸時代にまで思いをはせているのだろうか。

〈佳作〉

震災の傷跡残す遊歩道

中島 一子

心すでに花の箱根に遊ぶかな

周東 澄江

若布刈り舟遊覧船の波かぶる

石原 新

●自由題

〈特選〉

古雛の首を留めいるセロテープ

坂倉左武朗

雛祭りに招かれている。お世辞を言いながらためつすがめつしていると、目につかないような所をセロテープで留めてある、というところだろうか。いずれにしても、雛とセロテープの取り合わせの意外性は面白い。

〈佳作〉

売られゆく牛の毛を梳く春の宵

北川 弘子

能面を外せば若し桃の昼

野村多加子

片手間に梅を咲かせて宮仕え

蘭田 郁子



参加作品 編集部選

氣

送り荷や日々気忙しく四月来る	佐藤 まり
筍の土盛り上げる気骨かな	井村 善也
潮騒も春の気配や海の青	谷 しげ子
氣の抜けぬ友を真中に花見酒	井村 善也
長閑かな氣球たなびくビル遠し	加藤 政男
老いふたり根氣ひとすじ若布千す	増田 信子

遊

雀きて遊ぶ二月や梅の花	谷 しげ子
遊覧の船も鴨も東風の中	井村 善也
遊覧船後から押しぬ鴨の群	加藤 政男
子等遊ぶ夕日濃くなる春隣り	山口 信子
鳥羽湾の島を数えて遊歩道	佐藤 まり
潮時を見て出掛けたり磯遊び	野村多加子

自由題

ニヶ月の日射し寄せ合う葬の花	井村 善也
風を足し火色はげしく野火動く	浜口 佳春
陽炎や錆びし線路の行き止まり	中村 真一
春の灯におどろおどろし能の面	中村よみ子
遠目にも色の見えきし柳かな	小林 惠美
野火遠く見ゆる峠を越えにけり	谷 しげ子
大寒や鉄を打ち込む地の響き	山口 信子

浄土誌上句会のお知らせ

題

②季語ではありません

街裏自由題

締切・二〇〇四年五月二十日
発表・『浄土』二〇〇四年七月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-1-7 14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんはネッ

10かい目

かまち♡よろう



編集後記

晩春に犬を偲びて独り酒

岱潤

獣医をしている高校時代の友人から、最近ペットを亡くした後、病気になるてしまう人が多いので、君のところで供養して埋葬してもらえないかという相談があり、当寺では以前から檀家さんのために、ペットの供養墓があるので快く引き受けた。

そんなに依頼が来ることもないだろうと思っていたところ、二件三件と依頼の電話が入るようになった。先日もしお嬢さんが遺骨をもち、父親をはじめ家族一同喪服で納骨にみえた。本堂でご供養をするときには、祭壇はガラス製の位牌が飾られ、ドックフードとぬいぐるみの人形で一杯になってしまった。

先日新聞でペットの人間化が進むとい

う記事があった。飼い主を〇〇ちゃんのお母さんと呼び、共に寝、お揃いの服を着、同じものを食べ、いっしょのお墓を考えるとこのことである。記事の最後に「旦那より大事にされているペットが多いのでは」と結んでいたが、笑い話にならないような気がしてくる。

確かに当寺でも、自分が死んだときは、ご主人のお墓ではなく、ペットのお墓に入れてくれと懇願するおばあちゃんが出て困ったことがあった。これも最近の「これは言ってはいけないこと」という歯止めが無くなった現象のひとつかもしれない。人間関係ではなく、ペットに癒しを求める現代人、寂しくもあり、哀しくもある。(長)

雑誌『浄土』
特別会員、維持会員の方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光円寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮眞(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
塚田弘導(平塚・晴雲寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
真野龍海(芝・天光院)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

浄土

七十巻五月号 頒価六百円

年会費六千円

印刷

昭和十年五月二十日第二種郵便物認可

発行

平成十六年 四月二十日
平成十六年 五月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

発行所

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

法然上人鑑仰会

電話

〇三(三三七八)六九四七

FAX

〇三(三三七八)七〇三六

振替

〇〇一八〇・八・八二八七

編集顧問

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

村田洋一

大室了皓



昭和47年6月号



昭和47年7月号



昭和47年8月号



昭和47年9月号



昭和47年10月号



昭和47年11月号



昭和47年12月号



昭和48年1月号



昭和48年2月号



昭和48年3月号



昭和48年4月号



昭和48年5月号



昭和48年6月号



昭和48年7月号



昭和48年8月号



昭和48年9月号

法然上人鑽仰会の本



『念仏讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円

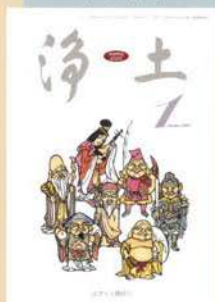


『ブツダ
知れば知るほど』
1,000円



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036